

第五回 【ユース編】

地球規模の気候変動リスク管理を、どう考えるか

[開催日時・場所] 2016年2月26日 於：山梨県 青少年センター

今回は、“ユース”として気候変動の国際交渉や環境に積極的に関わっている若者達とお話しをしてきました。本会合は、山梨県で2日間にわたり開催した「気候変動リスク管理に関するユース対話ワークショップ—持続可能性から考える気候変動対策、バイオマス利用を事例として」の一環として4人のCOP参加経験者を対象に実施しました。当日は、他にも11名の大学生・院生と、現地の専門家およびICA-RUSに参画する研究者が議論をかわしました。



リスクのトレードオフを考える

江守 地球規模での長期的気候リスクは、何も対策をとらず放っておくと気候変動による様々な問題が生じるというリスクがあります。しかし、一方で BECCS(Bio-Energy with Carbon Capture and Storage: CCS 付きバイオマスエネルギー)など、そのリスクを減らすための対策をとることも新たなリスク(生態系、食料、水等への悪影響)を生む可能性があります。みなさんはそういったことについてどのように考えますか。

藤田 地球規模の気候変動とは、関心がある、ないに関わらず全ての人に影響を受ける問題だと思います。そのため、解決策に“正解”は無いのかもしれないが、可能な限り高知識・関心層のみではなく、そうではない人も含めた多様な主体同士の対話のもとで、そのリスクに対する評価・意思決定を行えるのが理想的であるというのが自分の考えです。そのような議論を通して、それぞれの問題に対する意識、認識のずれを理解し、それを調整していくことがまず大切で、さらにその過程で気候変動の問題にあまり興味がない人にも少しでも当事者意識を持ってもらうことが一つ重要だと考えています。このような対話の場作りや合意形成の過程に僕自身は興味があっ

て、一番大切なことだろうと思いますね。

俵藤 問題が長期的なものであればあるほどリスクを考慮して結論を出すことに慎重にならなければならないですよ。今現在の利益だけで考えると長期的に損をするということもあるので、長期的な視点に立って気候変動という、リスクのトレードオフをはらむ問題を全員が考えるべきでしょう。

植原 今回のワークショップにおいては水や生態系の価値が高く評価されたことは意外で、とても面白かったです。しかし、社会を見ていると、水、生態系、気候変動よりも経済を主眼に置いているように思います。こういった価値観から抜け出し、その解決策を生み出すために地球規模で国際協調を成立させるべきであると考えています。そのためには、国際対立をなくすことをめざすことが一番先決であり、国際社会全員が同じ方向を向いていることが大事ですよ。

服部 自分は、気候変動が水や生態系に与える影響を懸念しています。世界中での気候変動リスクが定性的に評価される中で、先進国のみがその責を負うのは避け、途上国と協力して問題に取り組む必要がある

と考えています。その過程において途上国の声を聞くプロセスを取りいれながら目標を達成することが大事ですよね。どういった対策をとるべきなのか社会的にコンセンサスを取るためにみんなの声を聞くことが大切だと思います。

江守 みなさん COP (気候変動枠組条約締約国会議) に行かれた経験が非常に生きているのだと思います。まとめると、情報を把握・選択し、ステークホルダーの声を聞くプロセスが大切であり、長期的なリスク管理を行うべきであるということでしょうか。

地球規模の目標とローカルの話

江守 グローバルな制約条件と地域のコンテキストのすり合わせについてはみなさんどう考えていますか。

俵藤 グローバルとローカルの問題をすり合わせるためには、互いの立場に立って考えるための想像力が大事だと考えています。私は、模擬国連ではロールプレイを行っていますが、会議中は細かいところまでつめることが難しく、ローカルな部分が見えにくくなってしまいがちです。そのため、グローバルな問題を議論する際は自分の国のローカルな立場でものを考えるべきです。また一方でローカルな立場の人はグローバルな考え方を突き放すのではなく、制度など詳しい人の助けなど借りながらロールプレイを試みるべきだと思います。

植原 ローカルとグローバルが互いの立場、考え方をもっと知るべきだと思います。ダム建設問題などでもあったかと思いますが、再生可能エネルギーを導入する際、ローカルでは土地収用などの問題、地域的な環境影響などから反対意見が出ることもあります。グローバルな視点からみる

とこれらは許容すべきという意見が多いです。実際の仕組みづくりには、ローカルな人の立場に立つことが大事で、それを学べる今回のような機会は非常に重要でありがたいです。

服部 現状、グローバルな立場とローカルな立場の乖離が顕著ですよね。そのため、グローバルな議論によって定められた目標がローカルまで徹底されるかは疑問です。トップダウンで定められた目標だけではなく、ボトムアップ型のローカルな横のつながりの存在がかなり重要であるといえますよね。

藤田 自分は、以前、福島のいわきへ行く機会があったのですが、その地元の住民の方から聞いたのは、ローカルレベルの枠組みの中でも様々なステークホルダーがいて (ex. 県職員、市職員、コンサル企業、住民)、その中で誰も目の前にある問題に対して責任を取ろうとしないため、対話がかみ合わずに対立するという事例があるということです。ましてや価値観やバックグラウンドが大きく異なるグローバルな問題は言わずもがなですよね。しかし、ローカルな市民会議レベルでもグローバルな国際交渉レベルでも、何か物事を決めていくプロセス自体は人間同士の対話という意味で基本的には同じだと思います。ローカルな立場で働く人とグローバルな立場で働く人同士が互いの価値を認め合うことがまず大事であると思います。

江守 まとめると、グローバル、ローカル両方の立場に立つ想像力、ローカル間の横のつながり、ローカルもグローバルも構造、コミュニティのガバナンスは同じであることからローカルが自信を持つことが大事であるということですかね。

将来どうしたいか、他の世代への提言

植原 日本のユースと海外のユースはアクティビティが違い、日本のユースは主張が弱いため、もっと強く主張してもよいと思います。また就職すると学生の環境活動は終わることが多いと言われます。また最近、気候変動という問題を気候変動の解決に向けて活動する人からだけでなく、経済界の方面の人からも聞くようになり、両方の意見を聞くことが出来たことが個人的に非常におもしろかったですね。その中で、立場、意見が反対の意見を戦わせることはとても大事であると感じました。私自身は、幼少期から気候問題に興味を持っていて、振り返ると世の中を見るためのよいフレームワークだったなあと。これは、ぜひ下の世代にも身に付けてみてほしいですね。逆に上の世代には、1つの立場のみからではなく、ユースと同じように様々な視点からものをみてほしいです。

服部 国際会議でもユース・チルドレンは重要なステークホルダーであるとされています。そうしたなかで、国際社会において、日本のユースは主張ができていないので、もっと強く主張していくべきです。他の世代への提言としては、若い人がコミュニティから意見を吸い上げて発表するような仕組みづくりを上世代、立場の方々に作っていただけれることを期待しています。加えて、学生が就職した後も環境問題に携われるような機会が欲しいですね。

藤田 自分は、STS（科学技術社会論）に関連した対話の場作りの活動を通じて、どんなふうに社会に貢献できるかを考えていますね。高校生などの若いうちから、気候変動問題に代表される科学技術と社会の接点で生じるような問題には様々な立場の利害関係者がいて、それぞれに考え方や認識にずれがあることをまず知るべき

で、そういったことを若者自身が自分ごととして学べる機会が増えたらいいなと思いますね。

俵藤 私自身は、日ごろから他の人を理解し、他の人の立場で考えることを意識しています。今は自分が学生だから様々な立場に立って考えることができますけど、就職して視点が固定されることは避けなくてはならないなと考えています。上の世代にはもっと他の立場で環境問題を考えてみる事などもしてほしいと思います。逆に下の世代には自分の知らない人やものにもっと関心を持ち少し怖いことでも積極的にチャレンジすべきだと言いたいですね。

気候変動に関わる日本の“ユース”とは

江守 日本のユースの主張が弱いとはどういうことなのでしょう。またユースの議論というのはやはり現実的な問題というよりも、理想論みたいなものに帰着しがちなのでしょうか。

藤田 ヨーロッパなどのユースは比較的理想を語りがちで、日本人はその理想論に置いてけぼりにされがち傾向はあると思います。私自身は理想と現実のバランスが大事であると考えています。

江守 EUの人々などは日本人が考えないことを考えますよね。とくにユースは社会正義にのっとった考え方をよくしますね。それは育ってきた文化などが影響しているのだろうと思いますね。

俵藤 リタイアした人は社会的立場などから解放されて様々な立場に立つことが出来るのでユースと立場が近いと思います。また国際的に見ると日本は環境問題の重要度の認識が低いですが、ヨーロッパは環境問題に対して前提知識が多いという印象があります。

江守 確かに就職したら社会的なしがら

みが多く、会社を引退した人は立場が自由になるという意味でユースに近いのかもしれませんが。しかし、これから就職するユースには就職してもひとりの自律的な個人としてもっと自由な立場でいてほしいと僕は考えますね。

山形 意識の高いユースの議論に将来の希望が持てました。現実問題として、日本の行政官も地方の人も、自分の立場を守りすぎであるという印象を受けます。加えて両者の対話の機会がほとんど無い事は、日本の将来に悪影響を与えています。また、トップダウン式の政策で無駄が生まれていることも問題であるといえます。

室田 どうすれば価値観が凝り固まらず、自由な立場からものをみることが出来ると思いますか、また価値観が凝り固まってしまっている人にはどのように対応すべきなのでしょう。

藤田 例えば、それぞれがある特定の立場に立って議論を行うようなロールプレイングゲームを楽しんでやる機会があると良いかと思います。そういった体験が若い頃からあるのがより望ましいかなど。会社の研修でもやっているところもあります。

俵藤 ただロールプレイングをすればよいというのではなく、その後の再評価が非常に重要です。模擬国連では、会議終了後に改めて、実際に実行するとしたらその案はどうかといったことを聞かれ、ガーンとすることがよくありました。それには、しっかりした知識がある人のサポートが必要だと思います。

江守 僕の経験でも、自分の発言や行動を振り返ってガーンとなる経験は非常に大事だと考えています。つまり常に内省的になるべきと言えます。自分の立場を内省して本当はどうすべきだったかを考えることで凝り固まらないようにする。また、ひとつ重要だといえるのは、自分と意見は違うけれども信頼関係が築けそうな人を見つけておくことが、硬直的に対立せずに、よい関係につながっていきます。

4人のみなさん、また参加くださったみなさん、ありがとうございました。